Akita University

教員養成学部における「体育理論」領域に関連した授業実践の再検討†
ー「スポーツと地域活性化」をテーマとしてー

伊藤　恵造*
秋田大学教育文化学部

中学校および高等学校においてその学習の重要性が指摘される「体育理論」領域は，その内容を取り扱う授業が学校現場において適切に実施されていないという根本的問題を抱えている．本稿は，こうした問題を踏まえて，教員養成学部における「体育理論」領域に関連した授業実践の分析から，その問題の解決の方途を探ることを目的とする．

「スポーツと地域活性化」をテーマとした授業実践から明らかになったのは，スポーツと地域社会を捉える受講者の視点が固定化していることである．本授業実践における学習過程は，受講者に「スポーツ」と「地域活性化」との固く結ばれた関係を切り離すことができることを示し，その接点に着目する視点を提示したものと考えられる．

「体育理論」をめぐる問題の解決のためには，スポーツを改変不可能な固定化したものとして捉えるのではなく，当該社会の社会的，政治的，経済的状況の下で，人びとが相互作用する際に創り出される「社会的構築物」として捉えるための視点の学習が必要である．

キーワード：「豊かなスポーツライフ」，地域社会，社会的構築物，秋田ノーザンハピネッツ

はじめにー本稿の目的ー

2008年３月に改訂された中学校学習指導要領，および，2009年３月に改訂された高等学校学習指導要領では，生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて，小学校から高等学校までの12年間を見通しつつ，発達の段階のまとまりを踏まえて「保健体育」の改善が図られた．とりわけ，知識の学習を一層重視する視点から「体育理論」の指導内容が明確化・体系化されるとともに，指導内容の定着がより一層図られるように，それぞれの授業時数（中学校で各学年３単位時間以上，高等学校で６単位時間以上）が明示された．

これまで中学校では，「体育に関する知識」という領域において関連する学習が行われ，高等学校の「（旧・）体育理論」とは分けて展開されてきた．今回の改訂で，中学校でも領域の名称が「体育理論」に変更され，①運動やスポーツの多様性（第１学年），②運動やスポーツが心身の発達に与える効果と安全（第２学年），③文化としてのスポーツの意義（第３学年）という学習内容が明示された．また高等学校では，①スポーツの歴史，文化的特性や現代のスポーツの特徴（入学年次），②運動やスポーツの効果的な学習の仕方（その次の年次），③豊かなスポーツライフの設計の仕方（その次の年次以降）とその内容が設定された[1]．そこでは，「運動やスポーツの仕方，あるいは運動やスポーツの原理や法則，そしてそれらの社会的な意味や文化的意義をわからせること」が重視されることになった（友添，2011：3，傍点筆者）．

新しい「体育理論」において目指される「豊かなスポーツライフ」とは，「高齢化の急激な進展や，生活が便利になること等による体を動かす機会の減少が予想される21世紀の社会」において，「生涯にわたりスポーツに親しむこと」を指している（文部省，2000）．すなわち，学校の「保健体育」の授業や運動部活動だけではなく，学校を卒業した後も自

2016年１月８日受理
†Considering the Local Revitalization: A Practical Report of a Class “Sociology of Sports”
*Keizo Ito, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

Akita University

らが生活する地域社会においてスポーツを継続していくことの意義が指摘されているのである．そして，この地域社会におけるスポーツは，住民個々の「豊かなスポーツライフ」の実現にとって重要であるばかりか，「地域社会の再生」においても重要な意義を有するものとして位置付けられている（文部科学省，2012）．

「体育理論」は，中学校と高等学校を中心とした学校現場においてその学習の重要性が強調される一方で，その実施にあたっての問題も指摘されている．それは，学校現場において，「そもそも体育理論が適切に実施されているのか」という根本的問題である．佐藤（2015）は，「体育理論」が授業内で扱われない理由として，「教員志望学生の大多数は体育理論の授業を実際に受けた経験がないために，体育理論の模擬授業を学生自身で計画する際の授業イメージがないこと」が指摘されたことを報告している[2]．この指摘は，教員養成学部における「体育理論」領域に関連した授業実践の再検討を求めるものと言えるだろう[3]．

そこで本稿では，筆者[4]が担当する「スポーツ社会学」の授業実践の分析から，「体育理論」をめぐる問題の解決の方途を探ることを目的とする．「体育理論」は幅広い内容を取り扱う領域であるため，今回は本授業内容の関連を考慮し，「スポーツと地域活性化」をテーマとして設定した．「豊かなスポーツライフ」の設計を目指す「体育理論」において，「少子高齢化」や「人口減少」等，常に変動する地域社会とスポーツをどのように関連付けるかを学習することは，重要な課題の一つと考えられるからである[5]．

1.「スポーツと地域活性化」[6]に関する議論

授業実践の展開をみる前に，スポーツと地域活性化に関する議論を整理しておきたい．

「スポーツと地域活性化」と言っても，その時の「スポーツ」が指し示す内容は多岐にわたっている．オリンピックやFIFAワールドカップなどの世界的なビッグイベントから，高齢者たちが身近な場所で楽しむ活動，学校で行われる運動部活動までのすべてが「スポーツ」である．

今日の多様化する「スポーツ」への参加状況を，文部科学省は，「する」スポーツ（自ら行うスポーツ），「みる」スポーツ（テレビや会場で観戦するスポーツ），「ささえる」スポーツ（指導者やボランティアとして関わるスポーツ）と3つに分類して説明している（文部科学省，2012）．また，「スポーツ」の意味内容が多様であるがゆえに，「地域活性化」の内容もさまざまで，コミュニティ再生や経済波及効果，医療費削減など，各種の期待がかけられている．

後藤（2012）は，「する」，「みる」，「ささえる」で分類された地域社会で行われるスポーツを，さらに「個人生活レベルで実践されているもの」と「何らかの形で地域社会との関係を持つもの」に分類した（表1）．この分類により，地域社会における「する」スポーツは，楽しみや健康のために個人的あるいは仲間同士で行う「個人的･同好的スポーツ」と，スポーツ活動を通して地域社会形成への寄与が期待される「コミュニティ・スポーツ」に，「みる」スポーツは，インターネットやTV・新聞などを通してさまざまなスポーツ情報を楽しむ「情報としてのスポーツ」と，スポーツ観戦を通して地域社会の連帯感や統一感を醸成する「シンボルとしてのスポーツ」に，そして「ささえる」スポーツは，子どものスポーツ応援や部活動のマネージャーなど選手やチームを個人的に支える「個人的・同好的サポーター」と，地域のスポーツイベントやクラブの運営・指導に携わる「スポーツ・ボランティア」にそれぞれ整理された．そのうえで後藤は，スポーツ実施に関する全国調査の結果等を踏まえて，「地域社会におけるスポーツの実態は，『個人生活レベル』のスポーツが量的に拡大している傾向にある」ことを指摘し，それを「地域生活レベル」のスポーツへと転換する組織的・政策的仕掛けを用意していくことの必要性を主張する．

表1　地域社会におけるスポーツの分類

	個人生活レベル	地域生活レベル
する	個人的・同好的スポーツ	コミュニティ・スポーツ
見る	情報としてのスポーツ	シンボルとしてのスポーツ
支える	個人的・同好的サポーター	スポーツ・ボランティア

（出典：後藤，2012：p.101）

今回の授業では，後藤（2012）の問題意識を共有しつつ，「地域生活レベル」の課題解決を志向するキーワードとして「地域活性化」を用いることとした[7]．また，「スポーツ」の内容については，「スポーツ立県あきた」を宣言している秋田県（秋田県観光文化スポーツ部スポーツ振興課，2014）の状況を踏

まえて，スポーツ観戦を通して地域社会の連帯感や統一感を醸成する「シンボルとしてのスポーツ」に関連したプロスポーツクラブの事例を取り上げることとした．

2. 授業実践

「スポーツ社会学」は半期16回（2単位）の授業で，秋田大学教育文化学部学校教育課程専門科目の「中等教科専門・保健体育科」に位置付けられている．2015（平成27）年度は，後期水曜5・6限（12時50分～14時20分）に開講されており，受講者はAからPまでの16名で，地域科学課程3年生が3名，学校教育課程2年生が12名，科目等履修生が1名であった（表2）[8]．「保健体育」の教育職員免許状（以下，教員免許）取得希望者とともに，社会教育主事資格取得希望者，（公財）日本体育協会公認スポーツ指導者資格取得希望者が受講している．本稿では，主として，第1回（9月30日）から第5回（10月28日）までの授業実践を報告する．

表2　受講者リスト

	課程	学年	bjリーグ観戦
A	地域科学	3	―
B	地域科学	3	―
C	地域科学	3	―
D	学校教育	2	―
E	学校教育	2	―
F	学校教育	2	○
G	学校教育	2	―
H	学校教育	2	―
I	学校教育	2	○
J	学校教育	2	○
K	学校教育	2	―
L	学校教育	2	○
M	学校教育	2	―
N	学校教育	2	―
O	学校教育	2	―
P	科目等履修生		―

この授業は，私たちが日常生活で接するさまざまな「スポーツ」を社会現象として捉え，それらを取り巻く諸問題の分析を通じて，現代社会のあり方について検討することを目的として実施した．到達目標として，(1) 現代スポーツの社会的位置づけについて理解していること，(2) 地域社会における共同性の創出（維持）場面におけるスポーツの有効性と限界について理解していること，の2つを設定した．また今回の授業では，上述した「体育理論」をめぐる問題を踏まえ，受講者の了解を得たうえで授業の進行予定を変更した．第5回目には，秋田プロバスケットボールクラブ株式会社専務取締役の高畠靖明さんをお招きして，特別講義を実施することとした．第1回から6回の授業スケジュールは，表3の通りである．

2-1. 導入としての大学グラウンド

(1)第1回授業の概要（9月30日）

初回授業は，教室（教育文化学部3号館150講義室）に集合し，本授業を履修するにあたっての注意事項の説明を約30分間行った．上述した授業の目的と到達目標に加えて，次のことを説明した．この授業では，「私たちの生活に『近い』スポーツから『遠い』スポーツまで幅広く取り上げる予定だが，本授業ではそれらのテーマに対して，トップアスリートやスポーツ指導者などのいわゆる『スポーツの専門家』ではなく，『ふつうの人びと』の視点から迫ってみたい」（初回配布資料より）．説明終了後，2011年に人工芝に改修された秋田大学グラウンドへと全員で移動した．グラウンド内に入る前に，入口の扉に掲示されたグラウンド利用に関する「注意書き」を全員で確認した[9]．そこに書かれていたのは，次のような趣旨のものであった．「このグラウンドは授業の利用が最優先されるものであり，授業日である平日については，16時までは授業以外の使用を認めない」．「保健体育」の教員免許取得希望者を中心として，授業や部活動でグラウンドを何度も利用している者は多かったが，その「注意書き」の存在を認識していた受講者は一人もいなかった．受講者は，この内容を確認しつつ，グラウンドの中に入っていった．

受講者には，グラウンドに入ったところの木陰に腰を下ろし，グラウンドの中央部の方向を観察してもらった．グラウンドには，サッカーボールで遊んでいるようにみえる学生（らしき男性）3名と，グラウンドの奥の方で砲丸投げの練習をしている（明らかに大学関係者ではないと思われる高齢の）男性1名の姿が見られた．そこで筆者は，受講者に次のように問いかけた．「あの人たちは，何をしているのでしょうか．さきほどの『注意書き』の内容を思

Akita University

表３　授業スケジュール

		テーマ	実施内容
第１回	9月30日	ガイダンス	○授業を履修するにあたっての注意事項を説明した. ○大学グラウンドに移動し，その利用のルールと現状を確認した.
第２回	10月７日	「スポーツと地域活性化」とは何か？	○「スポーツと地域活性化」について説明された文献（後藤，2012）の内容を確認しながら，論点を整理・確認した. ○第５回（10月28日）に高畠さんの講義があることを伝えた.
第３回	10月14月	事前学習をしよう①	○高畠さんによって書かれた文献（高畠，2013）を講読した.
第４回	10月21日	事前学習をしよう②	○「秋田大学でスポーツを活用して地域活性化を行うために何をしたらよいか」をテーマにグループワークを実施した.
第５回	10月28日	特別講義「スポーツと地域活性化」（高畠靖明さん）	○高畠さんによる講義を実施した.
第６回	11月４日	事後学習をしよう	○前回の講義を振り返り，それぞれの感想を確認・交換した.
―	11月７日	○bjリーグ（秋田ノーザンハピネッツV.S.横浜ビー・コルセアーズ戦）観戦（受講者４名）（秋田県立体育館，18時から）	

い返してみてください．あの人たちは，規則を守っていない人たちですよね」．すると受講者から，「さっき，あの（砲丸投げをしている）男性が，私たちの近くを通って練習をしに行く時には，（規則を守っていないなど）何も感じなかった」，または，「普段，部活でグラウンドを利用していて，あの砲丸投げの男性のことは知っていたけれど，今まで何も考えたことはなかった」といった発言があった．

こうした受講者の発言を確認したうえで，筆者は，次のような趣旨の説明を行った．

私たちは，日頃の授業等において，物事の理念やあるべき姿を学ぶことが多い．例えば，学校教員を目指す人たちは，学習指導要領等に記載されている「学ぶべき内容」について学習している．しかし，その理念やあるべき姿が実際の「現場」でどのように反映されているか，活かされているかについては，学習指導要領には記載されていない．今回のグラウンドの「注意書き」（規則）について言えば，利用規則が設けられているからと言って，必ずしもその通りに利用されているとは限らないということ．そのことは，今，グラウンドを利用している人たちの存在が示している．ここで考えて欲しいことは，規則を守ることの大切さを知っているはずの皆さん（受講者）が，「規則を守っていない人」を見ても，それほど問題として認識していないことについてである．なぜ，多くの皆さんが，問題ではなくむしろ戸惑いを感じてしまうのだろうか．このことについて，皆さんが感じたこと，考えたことを自由に感想に書いてほしい．

その後，教室に戻って感想を記入・提出し，初回の授業を終了した．

⑵　受講者の感想の分析

付表１は，その時の受講者の感想の抜粋である．感想から明らかになることは，多くの受講者が，グラウンド利用に関する現状を，［グラウンド利用の規則＝理想］と［グラウンド利用の現状＝現場・現実］の２側面から捉え，なおかつその両者を対立するものとして位置付けていることである．「理想と現実」（F，K，L）[10]という記述がそのことを端的に表しているといえよう．その上で,「現場に寄り添って現状をしっかりと把握すること」（D）や，「スポーツの専門家などからみた理想論ではなく普通の人々の立場から考えられる現実について学んでいく」など，「現場に寄り添って」考えることが大事ではないかという漠然とした考えが記述されている．

筆者の第１回の授業のねらいは，「スポーツと地域活性化」を考えていくために，まずは受講者が現実の「社会」をどのように見ているのかを探りつつ，各自の問題意識を掘り起こすことであった．すなわち，グラウンド利用の現状－換言すれば，管理をする側と利用をする側の齟齬－を認識してもらうことと同時に，その現状を目の当たりにした時に，受講者自身がどのように感じ，何を考えたのかを確認してもらうことであった．「大学の施設だから授業が優先（16時までは利用してはいけない）」という規則と，「空いているのだから使ってもいいだろう」と思う感覚は，どちらか一つが「正しい」というも

のではなく，どちらも「正しい」と言えるものではないか．このことを確認した上で，受講者それぞれの考え（「では，どうしたらよいのか」）の提示を期待していた．

しかしながら，受講者は，グラウンド利用の現状に「関心」（L）を持ちつつも，その理解は表層的なものに留まっていた．受講者の感想に見られた「『現場』から考えることが大切」という紋切り型の表現がここで表層的と推察する理由である．グラウンド利用の例からも明らかなように，必ずしも「現場」（利用者）が「正しい」というわけではないことは，受講者自身も感じていたはずだからである．

2-2.「スポーツと地域活性化」を理解する

以下では，第５回の高畠さんによる講義の前まで（第２回から４回まで）の授業の概要を報告する．

⑴　第２回授業の概要（10月７日）

第２回目の授業では，「スポーツと地域活性化」について説明された文献（後藤，2012）の内容を確認しながら，論点を整理･確認した．上述した通り，地域社会におけるスポーツには，「する」，「みる」，「ささえる」などの様々な参加形態があり，そこには多面的な効果が期待されていることを確認した．その上で，地域社会におけるスポーツの分類（表１）を踏まえて，スポーツによる地域活性化の課題が，「個人生活レベル」のスポーツを「地域生活レベル」のスポーツへと転換することにあることを説明した．

また，本授業の最後に，第５回（10月28日）に，高畠さんによる講義を行うことを受講者に伝え，次回の授業で，高畠さんによって書かれた文献（高畠，2013）を講読することを伝えた．

⑵　第３回授業の概要（10月14日）

第３回目の授業では，「地域を変える－プロバスケットボールチーム誕生と地域社会－」を主題とした高畠（2013）の講読を行った．

高畠（2013）では，秋田にプロバスケットボールクラブの「秋田ノーザンハピネッツ」ができるまでのプロセスが高畠さんの経験を踏まえて紹介され，その後，日本プロバスケットボールリーグ（bjリーグ）に参入するまでの出来事が詳しく報告されている．さらに，チームの経営に関して，選手の年俸の設定や地元自治体からの支援内容，ボランティア組織との関わりの様子なども紹介されている．本授業に特に関連した部分としては，「秋田ノーザンハピネッツの地域に与えた効果」という節が挙げられ，ブースター（ファン）を増やす方法や地域への波及効果がデータを踏まえて取り上げられている．

受講者には，文献の理解を深めることと同時に，秋田ノーザンハピネッツや地域活性化，そして高畠さんについて疑問点や聞きたいことがあれば書き留めておき，第５回の講義の際に質問するよう指示をした．

⑶　第４回授業の概要（10月21日）

第４回目の授業では，第２回，第３回の内容を踏まえたグループワークを実施した．実施に際して，16名の受講者を4名ずつのグループに分けた．テーマは，「スポーツを活用した地域活性化策in秋田大学」とした．各グループでディスカッションを行い，最終的にグループごとの案を提示することにした．

表４は，各グループの提案内容を示したものである．４つのグループから提示されたのは，いずれもスポーツ大会や運動会等のイベントを開催するという案であった．グループ１の「秋田大学主催のスポーツ大会」は，「地域の人が来る」ことを目標として考えられたものであった．また，グループ２の「なべっこ運動会」は，「子どもからお年寄りまでが参加する」ことを第一に，スポーツ以外の内容を含めて提示されたものであった．グループ３の「イベント（スポーツイベント）」では，具体的には「マイナースポーツ体験」などを実施しながら，同時にスタッフとして参加する運動部の活動を知ってもらう機会にすることも狙いとしていた．最後のグループ４の「マラソン大会」は，「健康」をキーワードとして，一部の人が参加するのではなく，幅広い人たちに参加してもらうために考えた，と説明があった．

表４　第４回授業におけるグループワークのメンバーと提案

	メンバー	提示された案（タイトルのみ）
グループ１	D，E，N，P	秋田大学主催のスポーツ大会
グループ２	A，F，G，H	なべっこ運動会
グループ３	B，I，J，M	イベント（スポーツイベント）
グループ４	C，K，L，O	マラソン大会

Akita University

4つのグループはいずれも，「自分（たち）に何ができるのか」を考えつつ，利用可能な資源を活用した案を提示した．特に，「保健体育」の教員免許取得希望者が多数を占める受講者にあっては，スポーツ大会を実施することが実現の可能性の面からしても有用なアイデアとして考えられたものと推察される．地域の「子どもからお年寄りまでが参加」し，なおかつ，スポーツをすることで「健康」になることができるという身体的・精神的・社会的効果をねらった提案であったといえよう．

しかしながら，4つのグループがいずれもイベント形式の提案を行ったことが象徴するように，これらの提案は「地域活性化」の対象となる「地域」のことよりも，「自分たちが何をしたいか」の方を優先させて考えられたものであったということができるだろう．彼らのアイデアの背後には，スポーツ（イベント）に地域の人びとが参加することが，自動的に「地域活性化」につながっていくという前提が横たわっていると考えた．ゆえに筆者は受講者に対して，果たして提案されたこれらのイベントが，地域社会において必要なものなのかどうか，また，もし必要だというならそれはなぜか，という観点からも検討されるべきではないか，という問題提起をした．その上で，「では，みなさんにとっての『地域活性化』とは何か」と受講者に問いかけ，次回（第5回）の授業には，このことを熟考した上で臨むことを課題とした．

2-3.「地域活性化」を考える

⑴　第5回授業の概要（10月28日）

第5回目は，高畠さんによる講義「スポーツと地域活性化」を実施した．講義内容の詳細は紙幅の都合上省略せざるを得ないが，はじめに自己紹介，次に，動画を使ったチーム（選手）紹介，そして球団スタッフの仕事内容が紹介された．その上で，テーマの「スポーツと地域活性化」の話題に移っていった．

高畠さんは最初に，「『地域活性化』といっても，ここにいる（受講者）16人それぞれに，考えていることは違うのではないか」と問いかけつつ，それでは共通理解が図り難いとして，ここでの定義を明示された．「私が考える『地域活性化』は，『地域の課題解決をすること』です」．そして，この定義を前提として講義を進めていくことを確認した．

講義は，秋田ノーザンハピネッツの『活動報告書』（秋田プロバスケットボールクラブ株式会社，2015）に基づき，コミュニティ活動としての「学校訪問」や「バスケ教室」，公的機関とのパートナーシップとしての秋田県の読書推進キャンペーン事業や少子化対策等への協力などが紹介された．また，「秋田ノーザンハピネッツ県民球団宣言」の「3つの理念」のうちの1つである「オラホイムズ」を紹介し，「この言葉に『地域活性化』のヒントがある」と説明された[11]．

そして高畠さんは，「『スポーツが地域活性化につながるのではないか』という話は全国で聞かれるが，より具体的に，プロスポーツ球団の秋田ノーザンハピネッツと『地域活性化』が結びつくのは，どんなものなのか，あるいは，どんなことなのか」と受講者に問いかけた．このことをテーマとして，前回（第4回）と同じ4つのグループに分かれてグループワークを行うこととした（写真1）．

具体的には，「次の実際に行っている4つの活動のうち，ノーザンハピネッツが秋田県の活性化に一番貢献していることはどれでしょうか」と質問を投げかけた上で，①ごみの分別によるエコの啓蒙活動，②ハピネッツのロゴの入った商品開発，③地域（地元）の清掃活動に選手が参加，④子どもたちの夢・憧れの存在となること，を挙げた．

受講者は，各グループにおける話し合いによって，それぞれの回答とその理由を報告した．その一例として，グループ4の報告を紹介する（写真2）．

「グループ4のOです．私たちが選んだのは，学校訪問（④）です．理由は，学校訪問をすることで子どもたちは選手から刺激をもらって，スポーツのみならずいろんな活動に積極的に取り組んでいくエネルギーをもらえると思いますし，そのことが将来

写真1　グループワークの様子①

写真２　グループワークの様子②

的に秋田県の活性化につながっていくと考えたからです」.

グループワーク終了後,「まとめ」として高畠さんは,「課題をみつけて，その課題解決のために行動すること」が大切であることを話され，授業は終了した.

⑵　受講者の感想の分析

付表２は，授業後の受講者の感想の抜粋である．受講者の感想には，これまでそれぞれが「地域活性化」に抱いていた素朴な疑問が記されていた．それは例えば,「地域活性化とは，地域のいいところを伸ばし，有名にしていくことだと思っていた」(D) という記述にある通り，注目を集める前向きな取り組みをイメージしていたことがわかる．それゆえ,「スポーツと地域活性化」についてのイメージは,「実際に競技したり，見たりすることで地域を盛り上げると言うこと」(L) になるのだろう.

「スポーツ振興法」(1961年) を改正して成立した「スポーツ基本法」(2011年) において，スポーツは,「国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠のもの」と位置付けられている．受講者の「スポーツと地域活性化」についてのイメージや考えは，この記述に代表されるスポーツ像を理念型として生まれてきたものと考えられる．しかし，高畠さんによる「地域活性化」の定義（地域の課題を解決すること）は，受講者の「概念を覆す」(E) ものであった．すなわち，スポーツへの参加（「する」,「みる」,「ささえる」）が自動的に「地域活性化」と結びついていたこれまでの考え方ではなく，スポーツと「地域活性化」の間の接点に注目する新たな視点の存在に気が付き始めたのである．「概念を覆す」と表現した受講者Ｅの次の記述にはそれが表れている．「ではなぜスポーツなのか，正直なところ自分はいまいちピンとくるものがない．音楽で地域活性化でもいいのではないか，美術で地域活性化でもいいのではないか，そう考えるとキリがない」(E).

受講者は，高畠さんの講義を聞き，新たな視点から「地域活性化」を考え始めている．例えば，地域科学課程所属の受講者は,「『その地域のスポーツチーム』というのは，まさにその地域にしか存在しない，唯一のものなので，特色という面では素晴らしいものを持っている」(A) と，広く地域社会における各種の住民組織やイベントなどの「存在」を視野に入れつつ，その中での「スポーツチーム」の特色を指摘している．また，次の受講者Ｂの記述からは，自らの関心や経験に即して「地域活性化」を考えようとしていることがわかる．「地域の活性化について考える際は狭い視点にとらわれて『この文化財が～』や『この史跡が～』という考えになるのではなく，地域の人々の視点に立ってみるということをして，『この地域には何が必要なのか』『この地域はどんな問題があるのか』という広い視点も持ち，その両方の観点から地域活性化を考えていきたいと思います」(B).

一方,「保健体育」の教員免許取得を希望する受講者Ｈの記述からも，所属する運動部が子どもたちを招いて行っている取り組みの経験と重ね合わせて，新たな視点を発見しつつあることがうかがえる．受講者Ｈは,「あまり広く知られていないハンドボールを子どもたちに教え，活動させる機会を与えていることが地域活性化に貢献していると言われて，そうなのかと自分は地域活性化に多少なりとも貢献しているのか」と思っていたが,「それと同時に，これを行うことで地域は何を活性化されているのであろう」とも考えていたという．ところが，高畠さんの「地域活性化」の考え方を聞き，次のように考えるようになった.「今まで私たちが行ってきたことの考え方を変えなければ私たちが活性化しているのは地域ではなくハンドボールであると思いました．ボール遊びをハンドボール活性化から地域活性化にするには，例えば秋田は活気が足りないと感じていればこれから秋田を担っていくより多くの子どもたちにハンドボールを教えることで，その子どもたちを通してさらに広め，秋田全体でハンドボールに興味を持ってもらい，ハンドボールチームを

Akita University

作っていろいろな大会に出場して…とみんなで盛り上がれるようにしようと考えればボール遊びも地域活性化に貢献していると言えると思いました」(H).「子どもたちにハンドボールを教えること」はハンドボールの活性化につながっているが，さらにそれが「地域活性化」につながると言うためには，その接点について自分自身が考えていかなければならないということに気付き始めていることがここから読み取れる.

さらに，ここで確認されたのは，受講者が自らの視点で考えていくことの大切さを記述している点である．高畠さんが提示した「地域活性化」の定義は，高畠さんの問題意識に基づいた定義である．ゆえに，それは人によって変わりうるものである．だからこそ，受講者Bは，「自分も新しい地域の活性化の形を探っていき，高畠さんの考えをそのまま使うのではなく，自分なりに『地域活性化とは何なのか』ということの結論が出せるようになりたい」(B)，と記述しているものと考えられる．また，高畠さんの講義を，「『地域活性化は大事』などといった単に聞こえのいい言葉で考えることなく，テーマを自分の言葉で捉え直し解決法を探すというプロセスであったように感じた」と言う受講者Pは，「今回はたまたま地域活性化で考えたが，これはどんな場面でも応用できることであったように感じる」(P) とも記している.

4. まとめにかえて

「スポーツと地域活性化」をテーマとした授業実践から明らかになった問題は，受講者がスポーツと地域社会との関連を「わかっていない」ことではなく，スポーツと地域社会を捉える視点が固定化していることにあったと言えよう.「スポーツを振興・推進することが地域活性化につながる」というのがその背後にある認識であり，そこでは「スポーツ」と「地域活性化」の関係は，固く結び付けられたものであった[12]．本授業実践における学習課程は，受講者に「スポーツ」と「地域活性化」との固く結ばれた関係を切り離すことができることを示し，その接点に着目する視点を提示したものと考えられる.「体育理論」をめぐる問題の解決のためには，スポーツと地域社会との関係を教条的に「わからせること」ではなく，スポーツと地域社会との関係を切り離すことでその接点を受講者に提示し，その上でスポーツと地域社会との関係性を考えていく作業が必要なのではないか．それはすなわち，スポーツを改変不可能な固定化したものとして捉えるのではなく，当該社会の社会的，政治的，経済的状況の下で，人びとが相互作用する際に創り出される「社会的構築物」として捉えるための視点の学習が必要ということである（コークリー・ドネリー，2011）[13].

本稿を結ぶにあたり，高畠さんの講義受講後の11月7日に秋田県立体育館で開催されたbjリーグ公式戦，「秋田ノーザンハピネッツV.S.横浜ビー・コルセアーズ」を観戦した受講者4名の感想を紹介しておきたい（付表3).

試合を観戦した受講者の感想には，「期待をはるかに上回る面白さ」(F)，「心が熱く」(I)，「最初から最後まで大興奮」(J)，「熱気に圧倒」(L) など，感情的な表現が目立つ．第1回の授業において確認したように，地域の事象を考えるにあたって，「現場」に足を運べばそれでよいということはないだろう．しかし，受講者が自ら意図的に対象との距離を縮め，目の前の出来事に「大興奮」しながら学習する機会はまた，彼らにとって貴重なものであるとも考えられる[14]．そのためには，教員養成学部における「体育理論」領域に関連した授業に，変化する社会の状況を反映した身近な教材を導入することが求められよう．それにより，受講者が現場へ足を運びつつ，そこから自らの問題として考える方法を錬成することが可能となるものと考える．さらに，そのような授業を実践していくためには，地域社会を対象としたスポーツの社会科学的研究が，理念的なスポーツ（と地域社会）を前提とするのではなく，スポーツと地域社会の接点を対象化するための方法論を提示するものでなければならないだろう.

［謝辞］

本稿で取り上げた授業の実施にあたっては，高畠靖明さん（秋田プロバスケットボールクラブ株式会社・専務取締役）にご協力をいただいた．高畠さんには，受講者をbjリーグの公式戦に招待していただき，貴重な学習の機会も提供していただいた．記して，感謝申し上げたい.

［注］

[1] 文部科学省（2011）新学習指導要領に基づく中学校・高等学校向け「体育理論」リーフレッ

Akita University

トhttp://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1306082.htm,（参照日2015年12月27日）.

[2] 佐藤（2015）には，日本体育科教育学会における「体育理論」に関する意見交換の内容が報告されている.

[3] 「体育は何を教える教科か」を問う中村（2003）は，1987年に山口県の小・中学校の教師を対象に行った調査から，「大学で学んだ教科専門科目の内容が現場でほとんど『役立たない』と思われていること」を明らかにし，「これは教科専門科目の指導内容が現場の体育指導やこれの改善と無関係な存在になっているということを示すもの」であると指摘している（中村，2003：660-661）.

[4] 以下，「授業実施者」についても，本稿では「筆者」と表記する.

[5] 佐藤（2011）は，とりわけ高校における「体育理論」の改訂では，「オリンピック･ムーブメントとドーピング，スポーツ産業，スポーツ施策，スポーツと環境などの社会的視点が強調されている」ことを指摘している.

[6] スポーツと社会に関わる幅広い現象を多面的な視点から取り上げた井上・菊（2012）では，その一つの章で「スポーツと地域社会」を論じているが，その内容は「スポーツと地域主義」，「地域スポーツクラブ」，「都市のストリート・スポーツ」，「市民マラソン」，「スポーツ・スタジアム」，そして「スポーツと地域活性化」の６つで構成されている．ゆえに，本稿は，スポーツと地域社会というテーマの一側面に限定して論じるものであることを断っておく.

[7] 「地域活性化」をスポーツ政策論の文脈で論じたものとして小林（2013）がある．その内容理解にあたっては，伊藤（2015）および小林（2015）も参照していただきたい.

[8] 受講者には，2016年１月13日に行われた同授業内で，それぞれの感想等を本稿に掲載することを説明し，承諾を得た.

[9] その「注意書き」は，秋田大学の学生支援課によって作成されたものと記載されていた.

[10] 受講者F，K，Lの感想からの引用．以下，同じ.

[11] 「秋田ノーザンハピネッツ県民球団宣言」には，「3つの理念」と「7つのビジョン」が示されている．「3つの理念」には，「ハピネッツプライド」，「アリーナ・エンタテイメント」，「オラホイズム」がある．「オラホイズム」の「オラホ（おらほ）」とは，秋田で使用される「私の，私たちの」という意味の方言で，それから創られた言葉である．「オラホイズム」は，「『おらほのハピネッツ』と県民が声を揃えて応援できる最も身近な存在になります」，「秋田から全国へ，そして世界への情報発信源になります」，「『見る』『する』『支える』『語る』，新しいスポーツ文化を創出します」，「地元密着主義で誇れる秋田を未来へつなぎます」，という４つの「宣言」で説明されている（秋田ノーザンハピネッツ公式ホームページ，http://www.happinets.net/about03/, 参照日2015年１月８日）.

[12] この視点は，学校教育において身につけられたものというよりも，メディアから発せられるさまざまなスポーツに関する情報の中で形作られたものと考えるのが妥当だろう.

[13] 例えば，学校卒業後に地域の少年サッカーの指導に携わることになる生徒がいたとしよう．近年では，少子化の影響でサッカーやラグビー，野球などのチームスポーツを中心に，メンバー数を確保することができず，対外試合はもとより，練習中の「紅白戦」すら実施できないところは少なくない．このような活動における指導実践を想定した場合，「保健体育」において生徒たちが１チーム11人で行う“公認”ルールに基づいたサッカーの学習を行うだけでは不十分であろう．なぜなら，国際的に“公認”された「サッカー」というスポーツを固定化したもの（改変不可能なもの）として捉える視点は，彼ら指導者を子どもたちの「争奪戦」へと向かわせることにつながりかねないからである．指導者として，子どもたちや自らの「豊かなスポーツライフ」を設計するためには，地域社会の状況に応じてルールや指導方法を柔軟に変更することが可能であること（ローカル・ルールの存在とその意義）を認識していることが重要となろう．スポーツを社会的構築物として捉えるためには，スポーツが常に当該社会が置かれる時間・空間のさまざまなアクターによって創り変えられていることを学習する必要がある（コークリー・ドネリー，2011：7-21）.

[14] 受講者の感想からも明らかなように，テレビでプロスポーツを「観戦」したことはあっても，実際に会場で観戦したことのない受講者が多数存在する.

Akita University

［文献］
秋田県観光文化スポーツ部スポーツ振興課（2014）『秋田県スポーツ推進計画』
秋田プロバスケットボールクラブ株式会社（2015）『ターキッシュエアラインズbjリーグ2014-2015シーズン秋田ノーザンハピネッツ活動報告書』
コークリー，J.・ドネリー，P.／前田和司・大沼義彦・松村和則共編訳（2011）『現代スポーツの社会学－課題と共生の道のり－』南窓社
後藤貴浩（2012）「スポーツと地域活性化」，井上俊・菊幸一編（2012）『よくわかるスポーツ文化論』ミネルヴァ書房，pp.100-101
井上俊・菊幸一編（2012）『よくわかるスポーツ文化論』ミネルヴァ書房
伊藤恵造（2015）「書評 小林勉著『地域活性化のポリティクス：スポーツによる地域構想の現実』」『スポーツ社会学研究』23（1），81-84
小林勉（2013）『地域活性化のポリティクス－スポーツによる地域構想の現実－』中央大学出版部
小林勉（2015）「書評にこたえて」『スポーツ社会学研究』23（1），84-87
文部省（2000）『スポーツ振興基本計画』
文部科学省（2012）『スポーツ基本計画』
中村敏雄（2003）「体育は何を教える教科か」『体育学研究』48，655-665
佐藤豊（2011）「体育理論のポイントを考える」，佐藤豊・友添秀則編『楽しい体育理論の授業をつくろう』大修館書店，pp.13-20
佐藤豊（2015）「プロジェクト研究報告 体育理論領域」『体育科教育学研究』31（1），72
高畠靖明（2013）「地域を変える－プロバスケットボールチーム誕生と地域社会－」，木田悟・高橋義雄・藤口光紀編『スポーツで地域を拓く』東京大学出版会，pp.183-205
友添秀則（2011）「体育理論はなぜ必要か」，佐藤豊・友添秀則編『楽しい体育理論の授業をつくろう』大修館書店，pp.1-10

付記：本稿は，JSPS科研費 24700641の助成による研究成果の一部である．

Summary

The purpose of this paper is to describe the learning process of the perspective of understanding sports as a “social constraction” which are created from interactions of people under social, political and economic circumstances of that society.

Through the lecture by Mr. Takabatake who manages a professional basketball club, the students had been learning the importance of having the perspective of understanding the “local revitalization” as their own challenges. In addition, it was suggested that some of the students who had watched a basketball game associated their on-site experiences with the “local revitalization”.

For the provision of a class with the implementation of the “theory of physical education”, it is necessary to introduce familiar teaching materials reflecting the changing social circumstances. I believe that this effort will result in the development of their mindsets with which they go to a site and consider a problem as their own challenge.

Key Words : “happy life with sports”, community, social constraction, Akita Northern Happinets

（Received January 8, 2016）

Akita University

付表１　第１回授業後の受講者の感想（下線は筆者）

	学生	内容
1	A	今回，運動場を初めて訪れて，当たり前ですが普段全く自分が利用しない場所でも必要としている人が多く存在することを認識しました．また，作った施設が必要とされるのは良いことだと思いましたが，ルールと実際の活動との間に隔たりがあるということも，実際に現場を見てみて実感することができました．公のルールをやぶって活動をしている人も，「学生が来たら活動しない」など，自分たちの中だけのルールを決めて，公のルールが目指そうとしているもの（学生の学びの邪魔はさせない）を実現しているのかなと思いました．私は，公のルールはもちろん守られるべきだとは思いますが，公のルールが目標とするところが害されないのであれば，皆が利益を共有しても構わないように感じました．（もちろん，学生は授業料を払ったうえで使っているのに，地域の人はただ乗りで使っているようで，その点は問題なのかなとも思いました．）
2	C	ルールの上では16時までグラウンドは使用禁止になっているが，実際には使用している人が大学の内外にいる．しかし，これを許可してしまうと二人，三人と許可しなければならなくなるので，非常に難しい問題だと思う．ただ，防犯の面からしてみると，このまま放置したままでよいのかは考え直さなければならないと思う．このようなルールと現実の間のギャップについて，スポーツと社会との両方の面から考えていきたい．
3	D	今日は，実際にグラウンドを利用している様子を見てみて，いろんなことに気付きました．その施設を利用している人と，ただ机上でルールや設計をした人たちとのギャップはとても大きく，現場に寄り添って現状をしっかりと把握することの難しさを感じました．
4	F	実際に秋田大学の陸上競技場を例として，「理想と現実」について見ていったが，色々な面で理想と現実の差が見えた．これは社会全体にもいえることで，これから多くの場面で理想と現実はいかに違っているかを実感すると思う．また，スポーツの立場からすると，「理想と現実」は「専門家とふつうの人々」と関連づけられると思うので，この授業において，これからも「理想と現実」の両方の見方から様々なことを考察していけたらよいと思う．
5	I	確かにルールとしてはだめだけど，体を動かすということはとても大事なことで，健康にもつながる．しかし，学生以外の人が使うのは不思議な感じがあり，もし使わせるようにするなら許可証みたいなものを作ってグラウンドが空いている時間は使ってもよいとかすればよいと思いました．
6	K	スポーツ社会学と聞いて全くイメージを持つことができていませんでしたが，社会の理想と現実を捉えて，その差をどのようにしたらうめていくことができるかを考えることは，スポーツに関わる（あるいは）地域に関わるとすると大切なのかと感じました．グラウンドの機能などの社会的視点が，自分がスポーツをやっているために見えていないようにも思いました．
7	L	この大学内という限られた空間の中にも，社会の一画を見ることができることに関心を持ちました．理想と現実というものは，かみ合うことの方が少なく，今回のことを見ても，ルールと実際の使用状況は異なっていました．それに対して，異議を唱える人もいれば容認する人もいる．それは考え方の違いであり，一方が意見に対して批判することもあると思います．自分はそうするのではなく，互いの考え方を知り，尊重し，そして共有することで，よりよい関係性が生まれるのではないかと思います．
8	M	実際に，グラウンドを使っていて，カギがかけられているフェンスや無断でグラウンドを使っている人に対して，特に何も考えていなかったが，管理している側との意識の差を，今日の授業で実感した．現場の人間と，上の人間との間での意識の差は，実際に他の場面でも多く存在するのだろうかと興味がわいた．
9	N	スポーツ社会学と聞いてスポーツと社会を関係づけさせて考えることだと思ってはいましたが，スポーツの専門家などからみた理想論ではなく普通の人々の立場から考えられる現実について学んでいくのは今まで意識したことがなかったのでこれからの学習が楽しみだと思いました．

Akita University

付表２　第５回授業後の受講者の感想（下線は筆者）

	学生	内容
1	A	スポーツと地域活性化について，お話をうかがうまでは関連づけて考えることをしていませんでした．自分自身がスポーツとは関わりのない生活を送っているためか，スポーツ自体をどこか別の世界のもののように感じてもいました．スポーツをする人はスポーツをすることができればいいだろうし，見る人もスポーツを見て楽しんでいるのだろうと考えていただけで，スポーツが地域活性化につながるといった考えは，全くしていませんでした．しかし，お話の中で，地域活性化をその地域の課題解決だと定義づけたうえで，実際に秋田ノーザンハピネッツが行っている取り組みを知ると，スポーツで地域活性化（＝課題解決）をしていくことが可能であると考えることができるようになりました． 地域の課題として考えられることは，数多くあると思います．しかし，その中でも「どこの自治体でも言われている」ような，一般的な課題はいくつか考えられます．例えば，観光客が少ない，地域のものが売れない，地域の人々のつながりが希薄になっている，などといった問題です．このような問題を解決するために必要なことの一つが，その地域の特色，他の地域にはない独自のものを見つけ出し，売りにすることではないかと考えました．また，他の地域との比較を行わなくても，地域に特徴的なものが存在するというのは，身近なところで人を引き付ける力になると思います．そのように考えた場合，「その地域のスポーツチーム」というのは，まさにその地域にしか存在しない，唯一のものなので，特色という面では素晴らしいものを持っているといえます．地域のスポーツチームという存在が，地域の活動に関わったり，企業と協力したりといった活動は，人々をひきつけ，地域の課題解決に結びつく力を持っていると思えました．
2	B	今回の講義で「地域を活性化する」ということの意味を改めて考えさせられました．私は地域科学課程で日本史を専攻していることや社会教育主事を目指していることから，「歴史遺産をどうやって地域に生かしていくのか」や，「どうやって史跡や遺跡に人を呼び，自分たちの住む地域を知ってもらうのか」といったことを考えることが多かったのですが，その具体的な方策についてはあまり考えたことがなく，いつも机上の空論で終わってしまい，単に理想を考えるだけになってしまっていたと気づかされました．今回の講義で「地域を活性化する」ということは「地域の課題を知り，そこに合わせた方法で解決を図る」ということと似ていることが分かりました．なので，地域の活性化について考える際は狭い視点にとらわれて「この文化財が～」や「この史跡が～」という考えになるのではなく，地域の人々の視点に立ってみるということをして，「この地域には何が必要なのか」「この地域はどんな問題があるのか」という広い視点も持ち，その両方の観点から地域活性化を考えていきたいと思います．そして，自分も新しい地域の活性化の形を探っていき，高畠さんの考えをそのまま使うのではなく，自分なりに「地域活性化とは何なのか」ということの結論が出せるようになりたいと思います．
3	C	私は大学のCOC事業で歴史遺産を活用した地域活性化のプロジェクトに参加したことがありますが，地域活性化を考えるうえでそのとき一番の課題だと感じたのは，いかにして地域住民が一体となって取り組んでいくことです．一部の人だけが知っていたり活動したりしているだけでは，多くの住民は「よくわからない」や「自分には関係のない話」，「一部の人だけが盛り上がっている」と感じているようでした．そういう意味では，ハピネッツは秋田県民のほとんどが知っていると思いますし，秋田県初のプロスポーツチームということで期待も大きいと思います．ハピネッツは関西地域における阪神タイガースのような，地元の人が一体となって応援し，盛り上がっていけるようなチームになれると思いました．秋田県外出身の私からすると「秋田といえば○○」の中には秋田美人やお米がすぐ思いつきます．将来的にはハピネッツもこの○○のなかに含まれるような存在になれると感じました．
4	D	「スポーツを通して地域を活性化したい」という人はたくさんいるが，何がしたいのか尋ねると，自分のやりたいことを答える人が多く，その地域と向き合った活動を答える人が少ないという現状があることも知りました．自分自身も，漠然と考えていて本当の意味での「地域活性化」を考えることができていなかったです．高畠さんのお話から「地域活性化とは，地域の課題解決である」ということを学び，そのような考え方は無かったのでとても考えさせられました．地域活性化とは，地域のいいところを伸ばし，有名にしていくことだと思っていたので，まず課題を発見してそれを打開するための方法を考えていくという方法は，確かに無駄がなく合理的でいいと思いました．地域の課題をしっかり考えた上で，もっと具体的になにがしたいのか，実現させるためにはどんなことをしたらよいかということを考えていく必要があると感じました．

Akita University

5	E	以前の授業で一人ひとりがスポーツと地域活性化について考え話し合った時，自分は学生が小学校などに出向きスポーツ教室・イベントを開くことが地域活性化につながると考えたが，話し合いをし，他の人の考えを聞くと，夏休みなどに社会人の運動会を開くことや大学の体育館やグラウンドなどを一般開放することや秋大主催のスポーツ大会を開くなど様々な考えがあった．また高畠さんのお話でもハピネッツの選手が清掃活動に参加したり，スポーツ教室を開いたりとプロの球団・選手も地域活性化につながる活動を実際に行っている．このようにスポーツを通して地域は活性化している．ではなぜスポーツなのか，正直なところ自分はいまいちピンとくるものがない．音楽で地域活性化でもいいのではないか，美術で地域活性化でもいいのではないか，そう考えるとキリがない．しかしこの授業を通して改めて感じたのは，スポーツはやるだけがすべてではないということだ．スポーツは観て楽しんだり，スポーツを支えたりとスポーツはいろいろなかたちで関わることができる．だからスポーツに関わる人はたくさんいるし，それだけ多くの人にスポーツは影響を与えるのではないかと感じた． 高畠さんはお話の中で「課題を見つけ解決のために行動に移す」ことが地域活性化の定義ではないだろうかとおっしゃっていた．この話を聞いてプロの球団が活動するから地域が活性化される，意味があるという自分が持っていた概念を覆すことができた．この定義ならプロではない私達でも地域の活性化に力を貸すことができるし，先ほど述べたような授業でみなが考えたスポーツと地域活性化の案が実現すれば意味があるものになるのではないかと思った．
6	G	私は男子バスケットボール部に所属している．スポーツは昔から大好きで，いろいろなスポーツを経験させてもらった．「スポーツで地域活性化」という言葉を初めて聞いたときは，自分が大好きなスポーツで地域を活性化することができるならどんなに素晴らしいことなのかと考えた．しかし，いざ，スポーツで地域を活性化するために何をすればよいのかを考えたとき，全くアイデアが浮かばなかった．「スポーツで地域活性化」について理解することができていなかった．
7	H	私はハンドボール部に所属しています．ハンドボール部では月に１～２回付属小の子どもたちを招き，ハンドボールに触れさせ教えるボール遊びという活動を行っています．あまり広く知られていないハンドボールを子どもたちに教え，活動させる機会を与えていることが地域活性化に貢献していると言われて，そうなのかと自分は地域活性化に多少なりとも貢献しているのかとおもっていました．しかしそれと同時に，これを行うことで地域は何を活性化されているのであろうと考えていました．地域活性化とはあいまいでわかりにくいと感じていました． 高畠さんのお話を聞き，地域活性化とは「地域課題の解決」と定義付けたときぼやっとしていた地域活性化が考えやすくなりました．そこから私が考えたことは，今まで私たちが行ってきたことの考え方を変えなければ私たちが活性化しているのは地域ではなくハンドボールであると思いました．ボール遊びをハンドボール活性化から地域活性化にするには，例えば秋田は活気が足りないと感じていればこれから秋田を担っていくより多くの子どもたちにハンドボールを教えることで，その子どもたちを通してさらに広め，秋田全体でハンドボールに興味を持ってもらい，ハンドボールチームを作っていろいろな大会に出場して…とみんなで盛り上がれるようにしようと考えればボール遊びも地域活性化に貢献していると言えると思いました．私たちが行っていることもこれを行うことで何ができるのであろうと考えてみて，その考え方次第で地域活性化に十分に貢献することができると感じました．
8	J	私は地域活性化を考えたとき，地域に人が集まってにぎやかになるところを想像する．だが地域活性化というのはそういうことだけではないということを強く感じた． 私は小さいころからスポーツをやっている．今も生活の中心はスポーツである．地域活性化を考えるうえでスポーツと関連させることは私にとって一番身近で考えやすい題材ではないかと考えた．スポーツで地域活性化と一言に言ってもスポーツすることだけではなく，スポーツをする環境，スポーツをしている人，そして応援する人，様々なところから地域活性化に貢献できると思う．自分のどんな活動が地域活性化につながるのかもっと考えていきたい．大がかりな活動ができないのが現状ではあるが小さなことでも私たちにできることはあると思う．日頃からもっとスポーツと地域活性化について考えていきたいと思う．

9	L	「スポーツと地域活性化」に対するイメージでは，実際に競技したり，見たりすることで地域を盛り上げると言うことだと感じていました．しかし，講義の中であった「課題を見つけて，その課題解決のために行動に移す」という重要なプロセスを知り，一見スポーツが地域活性化に貢献していないような実践例でも，それぞれの目的・課題解決のために行う中でスポーツが内在的に存在しているのだと感じました．高畠さんもおっしゃっていた「スポーツ（またはプロスポーツ）＝地域活性化ではない」ということを納得できました．そして，スポーツを通して地域活性化に貢献するということは，そこに自身の考える地域の課題解決のためという確固たる目的意識があり，その解決手段の一つとしてスポーツが貢献できる，このような考え方が今後「スポーツと地域活性化」を考える上で重要なことだと考えることができました．
10	P	今回のお話では地域活性化という言葉を高畠さんなりの解釈でかみ砕いて説明していただいた．中でも一番重要だったのは「地域活性化は大事」などといった単に聞こえのいい言葉で考えることなく，テーマを自分の言葉で捉え直し解決法を探すというプロセスであったように感じた．今回はたまたま地域活性化で考えたが，これはどんな場面でも応用できることであったように感じる．抽象的な概念で捉えて終わりにすることなく，自分にできる範囲に落とし込む具体化を行うために今回のお話であったことを覚えておきたい．

付表３　bjリーグ観戦後の受講者の感想

	学生	内容
1	F	私は，初めてプロのバスケットボールを生で観戦した．友人から面白いよとは聞いていたが，その期待をはるかに上回る面白さだった．試合中もちろん選手のプレーを中心に観戦したが，スポーツ社会学でも学習してきた「見る人」や「支える人」にも注目しながら会場を歩いて回った．（中略）試合中はブースターのみなさんが一体となって応援している姿が印象的だった．（中略）ステージのスクリーンに攻撃時は「Let's GO Happinets!!」守備時は「ディフェンス!!」というように応援の仕方が表示されていた．これにより応援の仕方がわからない私たちも一体となり応援ができた．
2	I	自分は何度かハピネッツの試合を見に行きます．多分１年に１度は必ずといっていいほどです．自分はバスケットボールをしていたわけではありませんが，ハピネッツの試合を見るたびに心が熱くなり，ハピネッツを心の底から応援したくなります．（中略）秋田は人が少なく寂れていっていると思われているところがありますが，このゲームが行われた県立体育館はピンクで観客席が埋まり，ハピネッツを応援する人で溢れかえっていました．ハピネッツの力で地域が活性化してきていると感じずにはいられないとこの試合を見て感じることができました．
3	J	ハピネッツの試合に行かせてもらいました．私は，バスケに限らずプロのスポーツの試合を生で見るのは初めてでした．自分自身スポーツは見るのもやるのも好きなので試合はほんとに面白くて最初から最後まで大興奮でした．（中略）今回，試合観戦の機会をいただいたことをきっかけとして，よりハピネッツに興味を持ち，応援したいと思うようになりました．一緒に行った友達も同じ気持ちで，試合終了後「次いつ来る？」とお互い自然とそんなことを口にしていました．家族の会話が増える，とはこのことなのか，と感じました．
4	L	ハピネッツの試合を見に行きましたが，率直に感想を述べると，ただただ感動していました．バスケの試合どころかプロスポーツを見る機会が初めてだった私は，どんな雰囲気の中で試合が展開されているのかと気分が高鳴っていました．そして，会場に入ったとき，その熱気に圧倒されました．サポーターの方々の選手に対する熱い想いというのが，そこに居るだけで伝わってきました．試合が始まると，DJの掛け声に続きサポーターの応援が会場に響き，その中で選手の方途が白熱したプレーを繰り広げる．最初はその会湯の雰囲気に圧倒されていましたが，徐々に慣れ始め後半は夢中で応援していました．